472

荒田原遺跡（あらたばる）

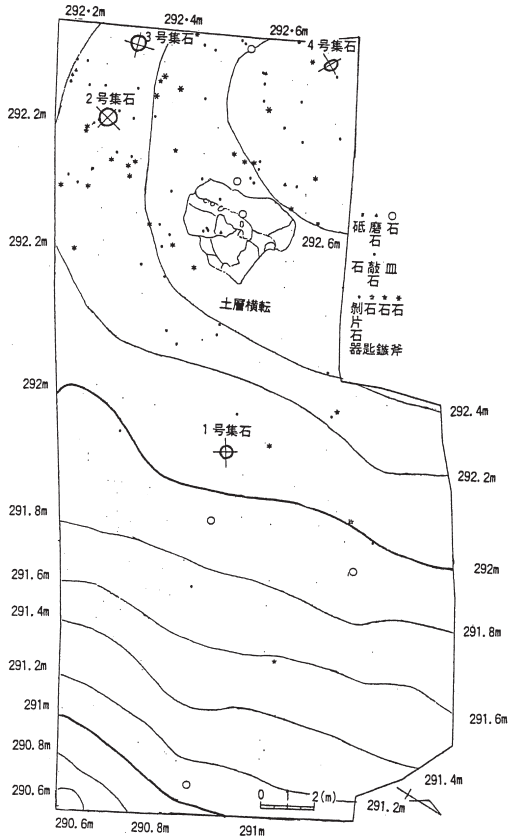
（肝属郡田代町大字麓字荒田原）

位置と環境

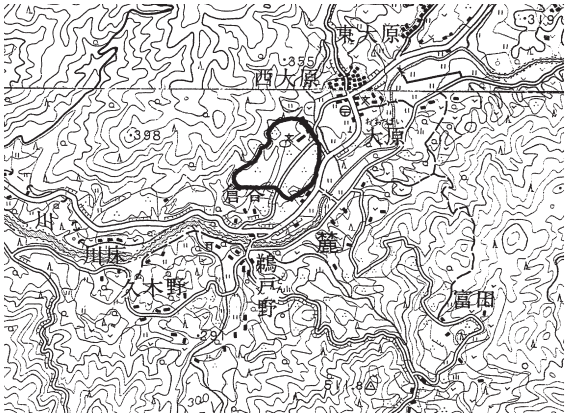
遺跡は町の中心部から南東に約５㎞のところにあり，剣ケ尾・鬼ケ宇都山塊の南東の裾野にあたる標高約250m程の台地上に立地している。本山塊を巡るようにして縄文時代から古代・中世の遺跡が所在する。

調査の経緯

平成５年（1993年），町が町立大原中学校のプール建設工事を計画したが，当地は昭和50年代頃に行なわれた校舎・体育館建設工事に際して縄文時代早期の土器が出土したことが知られていた。そのため，遺物包含層の残存を確認するために，町教育委員会が調査主体となり，県教育委員会の協力を得て詳細分布調査を実施した。その結果，包含層が残存することが判明し，同年11月から12月にかけて本調査を行なった。調査面積は，360㎡である。



第２図　遺構全体図



第１図　荒田原遺跡の位置

遺構と遺物

集石遺構が４基検出されたが，いずれも標高292m以上の割合に傾斜の緩やかな，調査した範囲では比較的高所で，安定した場所に位置している。石斧や石皿，剥片石器など石器類もこの周辺に散在することから，この辺りが生活範囲と考えられる。

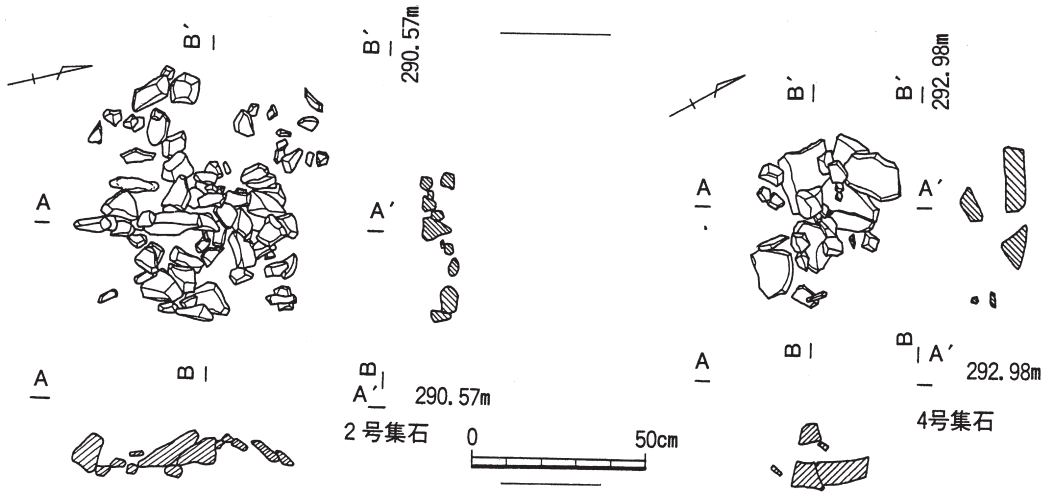
集石は，重量50～3400ｇの礫，21～95個からなっており，広がりは50～70㎝，厚さ10～20㎝の掘り込みを持たないものである。２号集石は小礫95個からなる最大規模のものであるのに対して，３号および４号集石は掌大以上の板石を少数個用いて作られている。

土器や石器は調査区域全般に広がっており，標高が高いほど数が多く，低くなると若干減少する傾向が見られる。

土器は，本遺跡の主体をなす前平式土器のほか，数量の少ない吉田式土器もいくらか見られる。吉田式土器は口唇に刻みを持ち，口縁直下に楔を縦２列に付した両側を細かな刻みにより丁寧に施文し，その下を貝殻腹縁での断続的な押圧による「押し引き文」を施している。内面の調整は，極めて丁重である。

それに対して，前平式土器は，吉田式土器と同様な円筒形の深鉢形土器であるが，口縁部は外側に若干開き，内面の調整はやや雑である。口縁部外面頂部には，１～２列の縦方向の木の実または貝殻等による刻みが見られ，その下は横あるいは斜め方向の貝殻腹縁による条痕が付されている。

前平式土器の中には，口縁部が平たいものと共に



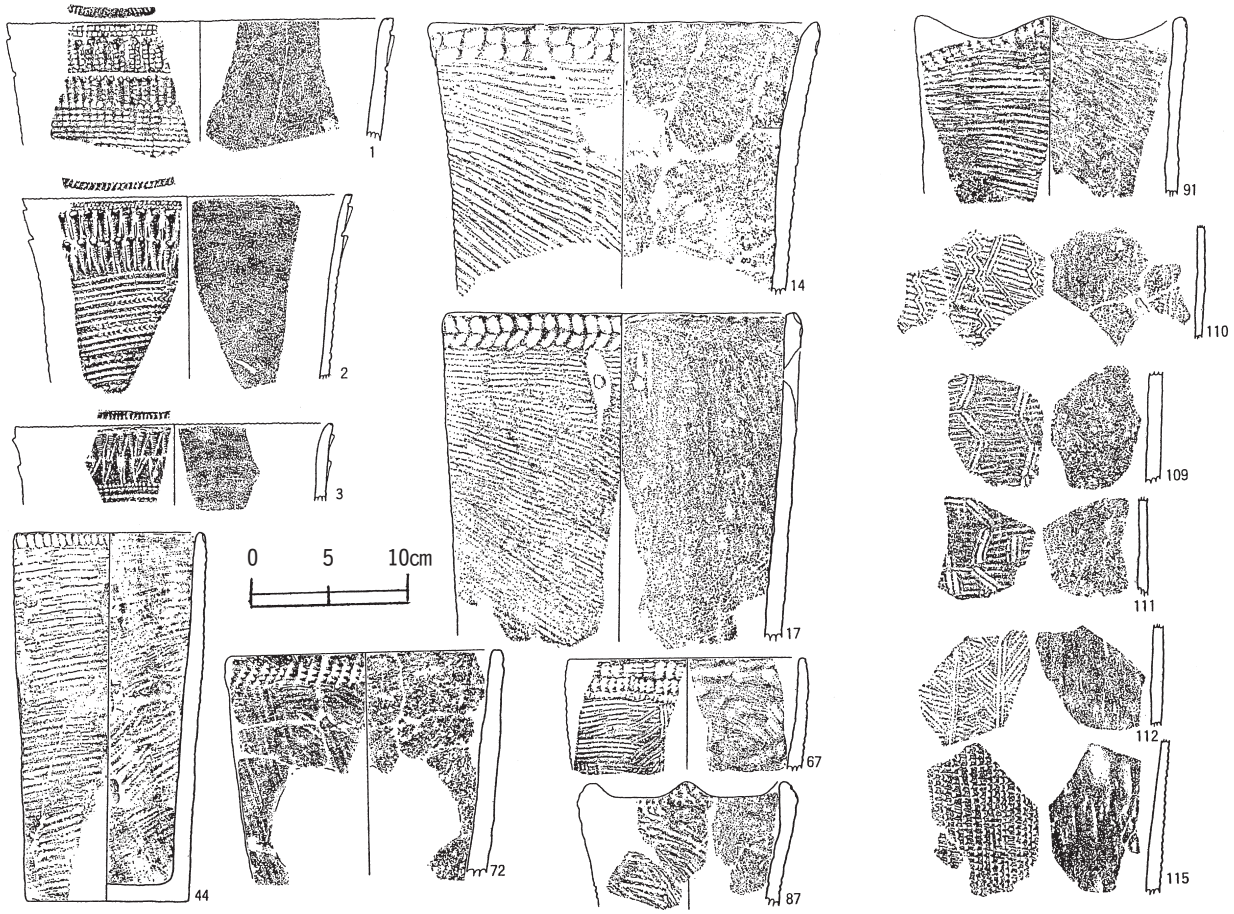
第3図　集石遺構

4個の突起を持つものや，波状を呈するものも見られる。また，口縁部が大きく開く，鉢状をしているものもある。

胴部についても，条痕の上に重ねて直線や斜線，縦方向の緩やかな波線の付されたものがあるほか，貝殻の腹縁を縦に押しつけたものも見られる。

底部は平底で，外面の最下部まで割合に粗い条痕で調整されている。また，外底は，木の実あるいは草の実の痕跡が残るものもあるが，そのほとんどは丁寧にナデ調整がなされている。

出土した石器は種類も多く，用途も多様と考えられる。



第4図　出土土器

石鏃には，磨製石鏃が4点，打製石鏃2点が出土している。

磨製石鏃は，基部が平基のものとやや内彎する弱い凹基のものであり，打製石鏃は2点とも凹基式と考えられる石材はいずれも頁岩であり，層理に従って薄く割れる性質をうまく利用したと思われる。

石斧は，刃部のみ磨かれた局部磨製の石斧を始め長円形や短冊形の打製石斧も見られるほか，剥片を用いて頂部または側縁に刃部を設けた剥片石器も多数出土している。

製粉用としては，磨石・敲石，石皿などが出土した。磨石・敲石は，遺跡の前を流れる花瀬川に普遍的に見られる花崗岩や砂岩などの転石を利用し，石皿は平たい板石を使用しており，凹部は深くない。また，極端に光沢のあるものも見られず，割合に短期間使用したもののように思われる。

特徴

縄文時代早期前葉，前平式期の一括資料といえる

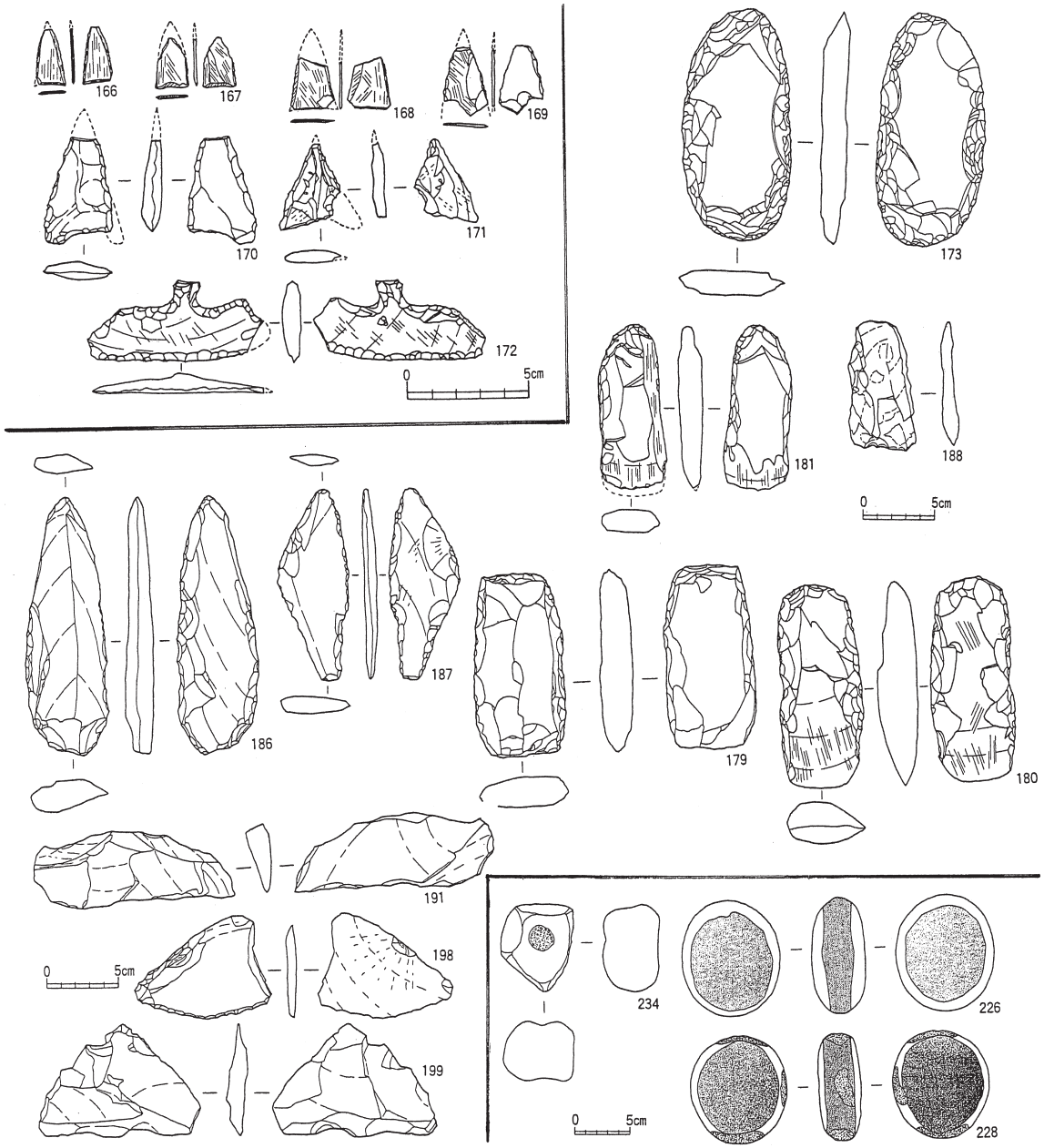
資料の所在

出土遺物は，田代町教育委員会に保管されている。

参考文献

田代町教育委員会1995「荒田原遺跡」『田代町埋蔵文化財発掘調査報告書』3

（繁昌正幸）



第5図　出土石器